

9 次年度の目標・課題

(1) ポストSGHの本校の在り方について構想を固める。

平成20年度に中高一貫教育校となって以来、「国際人として活躍できる真のリーダーの育成」を教育目標に、独自のグローバル教育を行ってきたが、SGH指定を受け、活動もシンカさせることができた。そのようなわけで、本校は指定前も言わばSGHで、指定期間はその活動をシンカさせるためのプロセスであるので、指定終了後も基本的には変わることはないのだが、財政援助が切れることで何がどのようにできるのかを具体的に探究していく。

(2) 「佐高ブランド」の確立とその広報

本校は、いわゆる東大合格者が何十人も出る超進学校でもなく、特定の芸術的才能が集まった学校でもない。大学の附属高校のように教員も生徒も専門的な指導が保証されているわけでもなく、海外からの帰国生も基本的にはゼロである。言わば全国に数多くある地元を支えられる地方の一般的な公立高校と言えるかも知れない。

この「普通の高校」がSGH活動に取り組み、大きな成果を上げてきた。課題研究では、「第3回関東甲信越静地区SGH課題研究発表会日本語プレゼンテーション部門最優秀賞(第1位)」、英語ディベートでは、「PDA全国高校即興型英語ディベート合宿・大会2019 課外活動初心の部 優勝(帰国生ゼロの1年生のみのチーム)」、「第3回PDA全国高校即興型英語ディベートベスト8(帰国生ゼロの1,2年生合同チーム)」、「HPDU新緑杯 第4位(II)」、フランス語班では、「東日本フランス語スケッチ・コンクール審査員特別賞(帰国生ゼロの1年生のみのチーム)」等々である。

特定の恵まれた条件がある、元々特徴のある高校の取組というよりは、むしろ、こうした「普通の高校」のSGH活動の取組こそ、日本の多くのまだグローバル化されない高校に最も役に立つのではないだろうか。すでに数多くの学校や他県の教育委員会等公的な組織の訪問を受けてはいるが、そうした意味も考えて本校の取組をまとめブランド化し、本校の使命の一つとして広報し広めていく。

(3) SGH事業のマニュアル化

校内での活動の継続化、そのための省力化を考えて推進してきたが、上記の広報、ブランド化のためにも一層推し進めていきたい。

課題研究の方法だけでなく、本校の特徴的な取組である「海外グローバル研修課題研究発表コンテスト」や「地域リーダーズシンポジウム」等のマニュアル化も一層進めたい。

(4) 中高連携の強化

学校設定科目CTP(クリティカルシンキングプログラム)を中学1年生～高校1年生で実施しているが、特に中学3年と高校1年の指導の継続性を考えていきたい。このSGH指定期間に、中学3年生では、内容をシンカさせ、現在は英語グループプレゼンテーションと英語ディベートに特化して指導を行っている。そのため生徒達のレベルもアップし指導内容も年々シンカしているところである。高校1年では、4教科のクリシンや日本語ディベートも入れて様々な試みを行っているが中学3年の指導との連続性を考えて探究していきたい。

また中学3年生全員が「シンカゼミ」として「課題研究」に取り組み発表会も行っている。中高を通した「教員研修」の成果もあり、今年度の生徒の研究は構成もしっかりとしたものにシンカしている。連携強化を通して一層の発展を目指したい。

(5) 関係諸機関との連携

指定終了後の自走を考えた場合、上記の構築が重要である。本校では、指定2年次に開発した「地域リーダーズシンポジウム」をさらに発展させ、地元の専門家との関係を深めていきたい。また、佐野市国際交流協会のみならず JICA 等との連携も深めていきたい